

表 題	西中国教区信徒大会 ご質問を頂いて		
著 者	高見晴彦		
作 成 日	2024年2月12日	最終更新	2024年2月15日

キリスト教会葬儀研究所(CCFI) <http://www.ccfi.jp/>

『2023年度 日本基督教団 西中国教区信徒大会 テーマ「葬儀について」』の中で、
関西学院大学の中道基夫学長の講演に引き続き、事前に寄せられた参加者からの
質問に答える形でお話ししたものです。

2024年2月15日 会の中で出た質疑応答追加

皆さんこんにちは。ほとんどのかたは初めてお目にかかるかと思います。私は中道先生のいらっしゃる関西学院大学と同じく兵庫県は西宮市にあります、プロテスタントの専門葬儀社、株式会社シャロームの高見と申します。こちらいわゆる阪神間、つまり大阪から神戸にかけてのエリアですけれども、以前こちらにおられて私も公私ともにお世話になった先生が、現在そちら西中国エリアで牧会されておりました、今期信徒大会で葬儀を取り上げるにあたって「葬儀社の人から話を聴くことなんて葬儀の現場以外ではなかなか無いし、ましてや西中国ではキリスト教系の専門葬儀社というものが珍しいので、何かしら質問をしてみたいという人もいるのではないか」とのことで、この度お誘いいただいた次第です。

とは申しましても、よく知られておりますようにこの日本の中でもそれぞれの地域によって葬儀のやり方、風習などは様々でありまして、私も地元の事情以外は書籍やネットの情報を見る、また人づてに耳にすることがある程度ですので、申し訳ないながらそちらのエリアの実際の葬儀事情を十分存じ上げているわけではございません。特に山脈など地理的な隔たりがあると葬祭文化も異なることが多いため、おそらくは西中国エリアの中でも例えば日本海側と瀬戸内側では風習にずいぶん違いがあるのではないかと想像しております。ですから折角頂戴しましたこの機会に、私の方こそ皆さんからのご質問を通して地域のご事情を教えていただきながら、私からは四方山話も交えつつ、いやもしかしたらそちらがメインになるかもしれませんが、実務的なご質問などにもお答えしていきたいと思っております。本日はどうぞよろしく願いいたします。あ、ちなみに私は中道先生のように名の通ったど偉い先生とは違って一介の町場の葬儀屋ですので、後半はどうぞお茶でも飲みながら気楽にお付き合いくださいね。

さて、申し上げたような地域の実情のギャップという点から、まずは私どもの周囲の事情について少し補足的なお話をさせていただきます。先ほど自己紹介の中で私は「プロテスタントの専門葬儀社です」と申しました。ここで「おや？」と思われた方もいらっしゃるかもしれません。「キリスト教の専門葬儀社」というフレーズは耳にしたことがあっても、わざわざ「プロテスタントの」、と断る必要があったのか、ということです。全国的に、といってもキリスト教系の専門葬儀社がある地域は限られているのですが、多くの場合にはキリスト教葬儀を扱う葬儀社というと、カトリックもプロテスタントも、正教会やその他の諸派も、ほとんどの教派を取り扱っているはずですが。しかし実はこの阪神間は全国でもかなり特異な状況にありまして、カトリックとプロテスタントのそれぞれ専

門の葬儀社が存在していて、取り扱う葬儀にかなりハッキリとした棲み分けがあるんですね。しかもそれぞれ1社ずつ、という訳ではなく、少なくともカトリックを中心に扱う葬儀社が2社、プロテスタントを中心に扱う葬儀社が6社程度はあります。「えー、そんなにあるんなら、ひとつふたつぐらい西中国に出店してくれてもいいんじゃないか」というお声も聞こえてきそうですね。

まあただ、日本のキリスト教人口は1%程度とも言われる限られたものですから、キリスト教葬儀の件数も比例して社会の葬儀件数全体の中ではごく限定的なものです。いくら都市部の人口が多い、また港町である神戸は昔からの教会も多くキリスト教比率が高いといっても、事情はそう大きく変わるものではありません。そのパイの限られた中で専門葬儀社の数が多いということは、つまりはひとつひとつの葬儀社がごく小規模である、ということなんですね。これは元々阪神間の葬儀業界全体の傾向でもあるのですが、古くから葬式の生花の飾りをはじめ、霊柩車や寝台車、また式場内でお世話をする司会者や案内のスタッフなど、多くの事柄について専門事業者へのアウトソーシングが盛んでしたし、都市部のわりに葬儀会館の広がりが比較的遅く、葬式場には自宅や地域集会所、また寺院などの宗教施設も多く用いられていました。そのため、葬儀社が営業するのに多数の人員を抱えたり、葬儀会館を持つことが必須ではなかったのです。極端な例では社員は経営者一人だけ、電話一本持っているだけで、依頼があればそのほとんどの業務を提携している葬儀社やフリーランスの葬儀士に委託して、売上から委託費を除いた一部を収入としている、取次業や手配師とでも言うかのような業態もあったほどです。

その上でキリスト教葬儀はというと、これもこちらではカトリックもプロテスタントもその多くは葬儀社の会館ではなく教会堂を式場として葬式が行われます。阪神間に限らず全国的に都市部ほどその傾向が強いとは思いますが、葬式を教会堂で行うことに特段に強い拘りがあるかどうかということよりも、まあ有り体に言えば人が多いということは財政的にも恵まれていて比較的設備の整った教会が多く、教会堂で葬式をしたいと希望すれば実際にできる状況だったから、ということも大きいでしょうね。兵庫県内でも中北部など郊外の教会では会堂もあまり小さくなく収容人数も限られていたり、設備が古かったり構造的に多数の人が集まる葬式に向いていないために、教会によっては専用の葬儀会館を持つ近隣の葬儀社で葬式を行うことがほぼ当たり前という場合もありますし、予め西中国教区のいくつかの教会のご事情を伺うと似たような状況も多いとのことですので、これは地域のギャップとしてはひとつ大きいものかもしれませんね。

そのようなことから、皆さんのそれぞれの地域事情、教会事情によってはもしかすると、今回葬儀社の代表と聞いて、いくつもの葬儀会館を持ち何十人ものスタッフを雇用している会社の社長というようなイメージを持たれたかもしれませんが、実際には例えば村落の中で地元の葬儀だけを請け負っている家族経営の葬儀屋さん、というような規模の葬儀社もこの周りでは珍しくありませんし、私たちの会社ももちろんご多分に漏れませんが、ですから毎日毎日どこかの教会で葬式をしているというわけでもなく、むしろヒマな時には「あれ？今月仕事したっけ？」なんていうこともあるぐらいなんですね。どうですか、急にこう、チープな感じに…いやいや、敷居が下がってきたんじゃないでしょうか。こんな調子でいきましょうね。

さて主催者を通して事前に頂戴しておりますご質問の中にも「地元以外の葬儀の風習を知りたい」というものがありました。90年代以降、メディアに葬儀が取り上げられることが増えたり、またインターネットの普及に伴って各地の風習もだいぶ減退し標準化された向きもありますが、この話題で今でも代表的に取り上げられるのは「火葬のタイミング」「骨壺の大きさ」「香典類の取り扱い」といったところでしょうか。

まず火葬のタイミングですけれども、全国的に比較的多く見られるのは亡くなってから大凡、納棺式・前夜式・葬式と進み葬式が終わってから火葬場に移動して火葬するという流れです。しかし地域によっては納棺式・前夜式ときてその次が火葬、そして拾って帰ってきた遺骨を前に葬式をする、というのが標準的なところがあります。遺骨で葬式をするから「骨葬」などと呼ばれることが多いですが、その地域の人からすれば他の地域が「遺体葬」だと呼びたいかもしれませんね。骨葬が有名なのは東北地方などですが、調べてみたところ西中国でも島根県の東のほうや山口県の萩の辺りでは骨葬もあるということでした。ただ以前松江におられた先生に伺うと「昔は骨葬だったらしいけど今は葬式の後で火葬するよ」と仰るので、時代とともに減ってきているかもしれませんね。

骨葬は比較的遅くまで土葬が残っていた地域に多く見られるそうです。これはなぜかという、土葬の時代というのは葬列を組んで家から出発して、途中で寺に寄って拝んでもらって、そこから墓地に向かって行って埋葬する、というのが一連の流れでしたが、この最後に墓に納まっているところまで行って葬儀が完結する、という理解が強いために「葬式が終わってすぐそのまま墓に行って納めるためには、先に火葬してないと無理だよね」

となった、こういう理由が大きかったようですね。ちなみに骨葬の習慣がある地域以外でももっと実利的な理由からあえて骨葬を選ぶ場合もあります。例えば近親者が遠方にいたり入院など何らかの都合ですぐに葬式に来られないような場合に、遺体を長期間置いておくと痛んでしまうので先に火葬しておきましょう、とか、事故などで亡くなって顔を見るに忍びないから、遺骨の横に笑顔の写真を置いておきましょう、とかそういったケースですね。コロナ禍の中では今葬式をしても人が集まれないし、流行が落ち着いてから改めて葬式をするつもりで先に近親者だけで火葬しましょう、といったようなこともありました。

次に骨壺の大きさですが、中国地方はこの5寸壺かもう一回り大きい6寸壺ぐらいが一般的だと聞いていますがどうでしょう。関西ではもう少し小さくて4寸壺か5寸壺ぐらいなんですけど、関東ではこの7寸壺や8寸壺など大きな骨壺を使うことが普通ですね。これは拾骨の量によるわけですが、関東では原則的に火葬後の骨は残らず持って帰りますので大きな骨壺が必要です。対して他の地域では墓に納めるだけの骨を拾って、残りは火葬場のほうで共同埋葬などするわけですね。これもなぜかという、関東も昔は一部の骨だけを拾って残りは火葬場に置いて帰ったそうなんですけど、人口が多いこともあってその残される骨もすごい量だったんでしょうね、あるとき政府が火葬後の骨は全部持って帰るように、と通達を出すんですね。関東圏の人はお膝元だったのでそれを守ったんですけど、他の地域では「べつにこっちは困ってないし、こっちにはこっちのやり方があるから」といってあまり従わなかったから、ということなんだそうです。ちなみによく訊かれる質問として「遺骨は必ず拾って帰らないといけないんですか」というのがありますが、これ全部を拾う決まりになっているところではできませんが、一部を拾う習慣の地域の火葬場では拾わずに全部火葬場に任せて帰ってくることもできます。「墓を継ぐ人もいないから拾って帰っても後が困るし」というような人も増えている中で、取りあえずは拾って帰ってどこかの合葬墓に納める人もいれば、合理的に「初めから拾わなくてもいい」という人もいるわけですね。

そして香典類の取り扱いですね。香典は贈る人が任意の額を入れて、もらった人はある程度の割合の返礼、いわゆる香典返しをするというのが一般的に見られる形ですが、これも昭和中期に「新生活運動」という社会運動が起こった北関東など一部の地域では「香典は一律1000円、香典返しはしない」といったような地域合意が根付いているようなところもあります。ネット情報なのでちょっと本当か分かりませんが、鳥根県の一部にも香典返しをしない習慣の地域があるそうですね。また香典返しのタイミングも、関西など

では一般に仏式で言う満中陰、つまり四十九日明け頃にしますし、西中国でも概ね似たようなタイミングのようですが、近年は関東圏を中心に香典をもらったその場で香典返しをする、「当日返し」や「即返し」などと呼ばれるやり方が定着している地域もあります。さらに阪神間では香典返しとは別に「粗供養」などと言って、葬式の時には香典を持参したかどうかに関わらず参列者に電車代程度の品物を渡すような習慣もありますし、地域によって様々ですね。

これらの習慣については特に宗教的だというわけでもありませんから、キリスト教葬儀の現場でもその地域のやり方に沿っていることが多いのではないのでしょうか。教会でなかなか見ないのは、それこそ中道先生の仰るmission1.0時代に敬遠された仏教的また神道的、あるいは民俗的な文化風習で、これらは他の地域との違いというよりもむしろその地域の中でキリスト教葬儀だけがしていない、ということもよくあるかもしれません。私個人的には、特に島根県には古くからの独特な風習が比較的多く残っているようですから、まあ聞きかじりですけど、葬式は友引だけでなく大安も避けるとか、参列者に赤飯を振る舞う地域があるとか、「仮門」…というのは出棺の時に棺をくぐらせる仮設の門のことですけど、それを組むところがまだあるとか、むしろ皆さんの地域の葬祭文化、そちらのほうにこそ大変興味があります。教会葬儀で採用するかどうかということではありませんけれども、中道先生の仰ったこれからのキリスト教葬儀の社会的意義などを考える上でも、まずはそれぞれの地元地域の葬祭文化、なぜそうなったのか、どんな想いが込められているのか、そこから調べになってみるのも面白いかもしれませんね。

ところで今回、主催者に予め「参加される皆さんのご興味はどのあたりにあるでしょうね？」とお伺いしたら、「まあやっぱり巷で言う『終活』というところではないですか？」と仰るので、皆さんには私が昨年神戸にあります教団の神戸イエス団教会というところでお話しした終活セミナーの際のテキストをご案内頂いてるかと思います。ご覧になっていない方もいらっしゃるかもしれませんがまずはこの内容を簡単に纏めておきましょう。

近年『終活』という言葉が流行しています。以前は自身や家族の終末期・死・葬儀・墓・相続といった事柄について、関心を持ってはいてもあまり大っぴらに語る事が憚られるような風潮もありましたが、言葉の流行も伴ってそのハードルも大きく下がり、新聞やテレビなどでも広く取り上げられるようになりました。けれども終活という言葉の指す内容の幅が広く漠然としていることもあって、なかなか具体的に取り組み始めることができ

なかったり、途中で挫折してしまう人も少なくありません。しかし終活をするといっても全員がその幅広い内容の全てを行わなければならないということではありませんから、大切なのはひとつ目には自分が関心のある、または必要のある事柄は何か、整理して考えること。ふたつ目には課題が難しい場合は悩みすぎて疲れる前に、専門家に相談してアドバイスを受けること。そして三つ目には、終活は見方を変えれば自分の最期や死後のことを他の誰かに委ねていく作業ですから、その相手とのコミュニケーションだと捉える必要があること。これらの部分をすっ飛ばしていきなりどこかの終活セミナーに行ったりして、さあエンディングノートを書きましょう、遺言書を書きましょう、葬儀の事前契約をしましょうなどと勧められても、気持ちも理解もついていかないし、周りの人を置き去りに物事を進めていっても受け入れてもらえずに結局役に立たないかもしれませんよ。とまあこういった内容で、加えて一般的に終活に含まれるある程度の具体的な活動をグループ分けして例示してありました。

ちなみに少しコマーシャルしておきますと、この時のセミナーは一般の方向け、つまり終活を自分のこととしてするほうの人を対象にしたものでしたが、もし終活を周りの人にお勧めする立場の人、例えば教職や教会役員さんが教会内で自分たちで終活の勉強会などをなさりたいような場合には、今回は内容まで取り上げませんがこのテキストの置き場と同じ私たちの有志研究会のウェブサイトの中に「2023年9月期テーマレポート・終活(概説)」という実務者向けの別のテキストがありますので、ご興味があればまた併せてご覧ください。

さて終活の導入部分としては、実のところ申し上げるべきことはこのテキストの内容だけでほとんど全てなんです。ここから先はそれぞれ具体的な活動の話に入っていくわけですが、終活というのはある意味ではその人の人生の総括になるという側面もありますから、その具体的な悩み、課題というものも百人百様、それぞれ相当に個別的なため一般論だけで説明されてもなかなかご自身の事情に適合しなかったり、またプライバシーに関わることも多いためにみんなの前ではあまり具体的な事情を説明しつつ質問はしにくいというのが正直なところでしょう。ですからこれは終活セミナーあるある話で普通のことなんです、今回事前に頂戴したご質問を拝見してみても、やはりこと終活に関しては控えめだったり漠然としたものが多かったんです。みんな終活に興味があるから、じゃあ集まってセミナーをしたらワッと盛り上がって質問もどんどん出てくるかという、まあ実際はあまりそういうことはなくて、その時はへ〜で終わって、帰る用意を始めて

る頃に何人かが講師の所にソーッと寄ってきて、「実はうちのおばあちゃんが…」などとかかなり具体的で込み入った相談をされる、というのがいつものパターンなのですが、逆に私も大っぴらには答えづらい質問というのも中にはありますので、まあそれはそれで良いわけですね。えっ、今日はオンラインだからそんなタイミングないじゃないか、と。まあそこは何かありましたら後日お電話やメールでソーッとお問い合わせ頂ければ、私のできる範囲でお答えしますが、専門的なことについてはくれぐれもお手柔らかにお願いいたします。

さてそんな遠慮がちな中でも必ず出てくる質問がお金の話ですね。今回も「具体的な費用を知りたい」というご質問がありました。弊社では一定の期間毎にお手伝いした葬儀の料金などの統計を取ってウェブサイトやパンフレットで公開しているので、直近3年間2021年から2023年を見てください。集計の上での細かい条件はいろいろあるんですが出てきた数字だけを申し上げますと、弊社から施主さんに請求した葬儀料金、その内には火葬料金などの立替金や消費税も含まれていますが、その合計の平均額は～ジャン！554,609円となっています。…ただし、いま一生懸命メモを取られた方もいらっしゃるかもしれませんが、ハッキリ申し上げますと残念ながらこの数字は全く皆さんのお役には立ちません。理由は大きく3つありまして、ひとつ目はこのような統計を公開している葬儀社は国内にはほぼ無いこと。ふたつ目は葬儀社によって料金の体系や含まれる費目が大きく異なること。みっつ目は皆さんの地域の事情や教会の事情を反映していないこと。つまり、そもそも金額を聞いたところで同じ条件で正しく比較ができないから、ということです。

例えば阪神間では葬式の式場として教会堂が多いと申しましたが、その場合には教会への葬儀献金には会堂や設備の使用料が加味されていると概ね理解されています。しかし葬儀社の会館を式場とする場合には、式場使用料は葬儀社への支払いに含まれているでしょう。式場の広さにもよりますが例えばこれだけで10万円とかそういった差が出てくるわけですね。また例えばいわゆる通夜振る舞いや精進上げなど飲食関係も地域によって習慣は変わりますし、弊社の場合は取り次ぎだけして施主さんと料理屋さんの直接清算ですので料金には含まれていません。しかしこれも葬儀社を通しての清算が当たり前であれば、親族などの人数によっては10万円単位の差が出てくる可能性もあります。火葬場への移動手段などを見ても、都市部では式場まで電車移動で式場からはマイクロバスなどというケースも少なくないものの、地域によっては自家用車で参集してその自家用車で火葬場へ

も行くのが当たり前というところもあるでしょう。全体的に物価水準の違いもありますから、テレビや新聞、ネットなどで見かける平均的な葬儀費用などというものも全くアテにならないとおいておいたほうが良いですね。

このように、私たちが統計を公開しているのもあくまで日頃営業している地域、お世話になっている教会の中で「まあこんな金額ですよ」というのを示すためですから、皆さんにとっても必要な情報源は地元の葬儀社でしかあり得ないわけです。実績を公開してくださいというのはまだ現在の日本の葬儀業の中では難しいかもしれませんが、自分の思う条件を示して事前に見積もりを取る、いわゆる事前相談ということは近年広く行われるようになってきましたので、よろしければ近隣のいくつかの葬儀社に訊ねてみてください。個人で交渉に行くのはハードルが高いというような場合にはあるいは、教会でいつも関わっている葬儀社があるなら、「教会のみんなで終活勉強会をするから、参列者の規模などを変えた何パターンかのモデルケースを作ってくれませんか」と教会単位で頼んでみるのも良いかもしれませんね。

さらに皆さんが情報として必要なのは葬儀全体にかかる費用負担についてなのですから、葬儀社の金額だけ分かっていても十分とは言えません。これと平行して教会の内側のこと、葬儀献金であったり司式者の謝礼であったりということ、それぞれの教会の事情の上で皆さんの中である程度話し合い共通意識として持っておかれるほうが良いでしょう。関連するご質問として「教会員、特に牧師以外の奉仕者へのお礼」というものがありました。これも例えば奏楽者についていえば謝礼額以前の問題として高齢化などにより都市部ですら奉仕者の確保が難しい教会も出てきていますから、葬式の奏楽もヒムプレイヤーになるのか、あるいは葬儀社からプロ奏者の提供を受けるのか、などとなってくると全く条件が変わってくるからです。他にも教会員有志が受付や献花の担当をしたり、式場が教会堂の場合には遺族の接待や清掃などを担うことになっている教会もあるでしょうから、その辺りも有償とするのか、相互の助け合いとして無償とするのかなど、これもそれぞれの教会の事情や皆さんの関わり合い方によります。そもそも献金自体、相場を気にされるご質問も多いのですけれど、それこそ教会員の皆さんでどのように自分たちの教会を支えていくかという問題ですので、これはぜひ皆さんの中でよく話し合っていたいただきたいところです。

とはいえノーアイデアで皆さんでどうぞと言われても、それができたら苦労しないと思

われるかもしれませんが、まあ私の個人的な考えを少し申し上げておきましょうか。そもそも問題としては「献金や個々の謝礼の額をそちらでいちいち決めてください」と言われるから施主側は困るわけですが、さりとて料金のように「これはいくら、こっちはいくらです」と決めて請求するのも教会側として気が引ける、ということですよ。私なら、司式者奏楽者を含めて教会側が担う奉仕の範囲を教会で定めて、その奉仕は教会の業として葬儀に携わる。当然、教会の業とする以上はその奉仕に対する謝儀は教会から支払う。そして施主さんに対しては自由な額の献金だけを教会に納めてもらうようお願いする。そこでもし「目安は」と訊かれたら初めて、「まあ奉仕者への謝儀がこれぐらいだから、それを考えに入れてくださったらありがたいです」ぐらいに伝えるのがいいんじゃないかと思っています。こうすると経済的に厳しい人でも無理をしにくいというメリットもあると思いますし、仏教式の場合に結構このようなスタイルに近くて、基本が御布施として集約されているために施主さん側としては考えやすいんですよ。まあこう言って採用されたことはないんですが、アイデアのひとつとしてはあり得るかと思います。

他に「具体的な事務手続を聞いておきたい」というご質問がありましたが、むしろちょっとご質問のほうの具体的な範囲が分かりかねるんですけれども、亡くなってから役場に死亡の届けを出したり火葬場の予約を行うといった葬式が終わるまでの範囲の事務手続については、近年は全国的に葬儀社が代行することが普通になっているはずですよ。ですから端的に言えば、先に葬儀社が決まっているなら連絡して「亡くなったんだけどこれからどうしたらいいですか？」と訊いたら「病院で死亡診断書をもらってください」とか「次はこの書類にサインしてください」とか半ば自動的に進めてくれるはずなんですよ。また葬式が終わった後のいわゆる死後事務や相続に関わる部分については、これも最近では小冊子やチェックリストなんかをオマケでくれる葬儀社も多いと思いますので、事前相談に行かれるならその時にもらってきても良いかもしれません。ですからあまり前もって気にしすぎなくても大丈夫なんですけど、仮に細かく説明し出すとかなりの時間になってしまいますので、もしご心配でしたら具体的に気になる範囲をまたお電話やメールなどでお問い合わせくださればお答えしますね。

次はちょっと可愛らしい感じのするご質問ですが「自分の略歴をどこまで書いたらいいのかわからない」というのを頂いております。これ恐らくは、すごく重厚な経歴の持ち主で書き切れないからどこを端折ろうかという話ではなくって、あんまり細かいところまで書くのも恥ずかしい気もするし、というような戸惑いのご質問だと勝手に解釈しているん

ですが、違ったらごめんなさいね。略歴についてはまず何のために書くかというところがひとつのポイントですが、考えられるのは「式次第に載せるから」「葬式のプログラムとして披露するから」「説教を考える参考にするから」「エンディングノートに書くから」という4つでしょうか。式次第に載せる場合として多く見られるのは、信徒の場合には俗に3点セットと言われる出生・受洗・召天、加えるとしても結婚ぐらいでしょうかね。受洗年月日はうろ覚えのかたもいらっしゃるかもしれませんが、通常は所属教会の台帳に記録されていますので教会側が分かっているはずです。これ以上のこと、例えば家族構成や転居、学歴、職歴、受賞歴、闘病歴などを載せる場合ももちろんあるんですが、少なくともこちらの周りではあまり多くはなくて、大抵は施主さんの側からこういうのを載せてあげて欲しいと希望があって載せたり、時には式次第と別の配布用プリントを施主さんが作って持ち込むようなこともありますから、その場合はそもそも悩みませんね。葬式のプログラムとして披露するというのも20年程前は時々あったんですが、一般参列者の減少傾向もあって近年はほぼ見なくなりました。まあこのあたりは私の関わっている教会の偏りもありますのでずっと続けているところもあるかもしれませんが、これはべつに礼拝のプログラムの一部ではありませんから、あんまり悩むようなら略歴披露自体をカットしてくださいと司式者にお願いしても良いかと思います。

説教を考える参考にするからという場合は、逆に思いつく範囲で何でも書いて構いません。先生方も実際使いやすいところしか採用しませんし、内容が中途半端でも気になったら先生のほうから「ここの詳細はどうなってますか」とお訊ねがあるはずです。あとはエンディングノートに書く場合ですが、これはもう「それを読む人が誰か」を想像していただくほかありません。お連れ合いやお子さんでしょうか、ご友人や後輩たちでしょうか、教会の皆さんでしょうか。いずれにせよその人たちにご自身が伝えたいなと思うことを書けば良いのです。例えばそうですね、略歴に大学は書いても〇〇幼稚園卒園とは書かないだろうという人が多いかもしれませんが、しかしある教会付属幼稚園の第1期の卒園生で、大人になってからその幼稚園の園長になりました、とかいう事情だとどうでしょう。途端に書き甲斐が出てきたんじゃないでしょうか。あなたにはあなただけの人生のストーリーがあります。そのあらすじが略歴だとすれば、物語の読者に伝えたいことはなんでしょうね。もちろんその場合はただ書くことに拘るのではなくて、お元気な間に伝えたいその本人に直接話してあげる時間を持つというのもより良いと思います。

「墓じまいのことにに関して訊きたい」というご質問もありました。これも近年よく耳に

するようになりましてね。状況により詳細は変わってくるのですが、基本的な流れとしてはまず元のお墓に入っている遺骨の移動先を見つけること、次に改葬、改めて葬ると書きますが、この改葬手続をすること、そして実際に遺骨を移動させること、最後に元のお墓を更地にして墓地経営者に返すこと、という順序になります。結婚などによって複数になった親族のお墓を纏めたいというような場合にはあまり迷わないんですが、承継者がいないとか、いても残したくないといったような場合には遺骨の移動先がまず問題になりますね。可能性としては教会墓地があればそこに受け入れてもらったり、地域の公営墓地やお寺などが経営している霊園に合葬墓があればそこに申し込んだりということが多いでしょう。改葬手続は元のお墓がある自治体の役場で必要書類を揃えて申請して改葬許可証をもらい、それを受入先の墓地の管理者に提出します。また現在はかなり特殊なケースを除いては、お墓は場所を買ったのではなく使用权を与えられているだけですので、元のお墓はその墓地の規則に沿って墓石などを撤去した上で経営者に返すことが普通です。

費用は受入先の墓地の使用料、これはいくらわかりませんが、あとは元のお墓の撤去費用ですね。場所や状態によって変わってきますが、阪神間で一般的なところではこれまでいわゆる一聖地のお墓で30万円前後とか、そういった値段でした。ただ昨今の値上げラッシュや廃棄物処理関連の規制が厳しくなっていることからすると、段々と高額になっていくかもしれません。これも元のお墓のある地元の墓石屋さんに訊くのが正解ですね。役場の改葬許可証申請は費用がかかりませんが、元のお墓が寺院境内墓地などにあっていわゆる離壇料トラブルといったことが起こる事例はあります。まあこの辺りも必要であれば詳細お問い合わせください。なお注意して頂きたいのは、テキストでも申し上げているように終活はコミュニケーションですので、墓じまいも一人で勝手に決めないことですね。親としては子どもがお墓を残されたら面倒だろうと考えていても、子どものほうは残して欲しいと思っているかもしれません。子どもの気持ちとしては折々お参りに行きたいから合葬墓だとしても近くでないと嫌だと言われたり、子どもが教会員でなくて教会墓地に入れられてもお参りに行かない、などといって喧嘩になるようなケースもよく見かけるわけです。まずはご家族でよく話し合ってくださいね。

さてまだいろいろとご質問は頂いているのですが、本会のスケジュールもありますのでこのあたりで一旦マイクを置かせて頂きますが、申し上げてきたようにまた具体的なご質問等がありましたらお電話やメールなどでお問い合わせくださればと思います。ただ本日お聞き頂いてお分かりのように、広く葬儀士は同じ葬儀業の職分の中で活動していま

すので、実務的な部分に関しては特にキリスト教系専門葬儀社であろうと一般の葬儀社であろうと答えする内容に大きな差は出てこないはずなんですね。何度も申しますように終活はコミュニケーションです。その関わりの中には大凡葬儀社も必要になってくるでしょう。そしていざ事が起こった時に実際に頼るべきは地元の葬儀社ですし、遠くの親戚より近くの他人とも言いますから、この機会にぜひ地元の葬儀社にも関心を向けて頂いて、皆さんの教会の葬儀がより豊かになるように、信頼できる葬儀社と良いお付き合いをしていってくださればと願っております。

▼▼会の中で出たご質問(質問は編集しています。回答は作り直しています)▼▼

「献花は喪主からしていますか、牧師からしていますか」

教職のお考えや個々の葬式の事情によりどちらもあり得ますが、近年はご遺族から行うことが相当多数であるように感じています。司式者から行うことのメリットとして挙げられるのは「やり方の例を示すことによって遺族以下参列者が迷わないため」というのが主ですが、それに増して「この人の死を最も悼んでいるであろう近親者を先に」という意識が強まっているからでしょう。ただ確かに案内をする葬儀社などのサポートが十分期待できなければ、どうぞと勧めてもやり方に迷って棺の前で狼狽えるご遺族はおられます。ですから予めご遺族(特に代表者)の様子に不安があるようでしたら、例えばどちらが先でなく一番初めに司式者にご遺族の代表者と並んで献花をするというのも一案かもしれませんね。また他の方法としては、司式者が入堂時(開式前)に献花をしておき、式の最後にご遺族が進む時には献げ方の例としてテーブルの上にその1本が置かれている状態にする、という方法が採られていた教職もおられました。

「献花をテーブルにするのではなく棺に直接、亡くなった方のお顔を見てするほうが良い見送りになると思うのですがどうでしょうか」

良いのではないのでしょうか。こちらの周りでも昔は参列者全員がテーブル献花をした後に近親者のみで式場に飾ってる生花を切って納棺献花をしていましたが、参列者の減少に伴って一般参列者の中でもご希望の方には納棺献花にお進みいただくよう案内するようになりました。しかし近年、参列者が親しい人ばかり小規模に纏まってくるようになり、案内すると参列者がほとんど全員納棺献花もするようになってきたため、テーブル献花を省略して初めから参列者全員で納棺献花をするという様態も増えています。ここ3年(2021～2023年)間の統計を見るとコロナ禍の影響もありますが弊社では実に12%しかテーブル献

花をした葬式がなかった程です。テーブル献花分の費用も減りますし、時間の節約になってお別れもゆっくりできるようになることも期待できます。ただこの数字は私がお遺族に「テーブル献花をしますか、しませんか」と毎回訊くようにしているから、ということも大きいでしょう。葬儀士によってはキリスト教葬儀でテーブル献花をすることが当然だと思いついて、それをしないということを想像できないような場合もあると思いますので、必要に応じて教職からも提案してみてください。なお献花を「テーブルだけにする場合(その後の納棺献花を近親者だけがする設定の場合)」と「棺の中だけにする場合(テーブル献花をせずに全員が納棺献花をする場合)」では後者の方が時間がかかることが普通ですので、参列者数が多いことが予想される場合などに全員で納棺献花をするのであれば出棺までの時間に余裕を持つなど予め葬儀社側ともよく打ち合わせる必要があります。また亡くなった本人が「病気でやせ細った顔を見せたくない」と希望していたり、お遺族が一般参列者に見せたくない、さらに参列者の中にも心苦しいなどで見たくないという心情の人がいる場合もあり得ますので、お遺族への希望の聴き取りなど配慮は必要です。

「一般葬儀社の方と葬儀の打ち合わせをしていた際、相手がずいぶんと型通りのやり方(献花の手向け方など)に拘っていたので、そう囚われなくても良いんですよと言うと嫌な顔をされたんですが、葬儀のプロに対して牧師からそういう意見をすることは控えるべきなんですか」

これは本当に葬儀士の性格によるところが大きいでしょうね。確かに葬儀社によってはかなり自分たちのやり方というものに拘る人たちもいますが、その理由のひとつには「怖い、不安だから」だというのがあられると思います。特に一般葬儀社ではキリスト教葬儀の施行件数自体がほとんど無いですから、携わった経験が少ないほどに、自分たちのやり方に自信がないために過去の経験やどこかで見聞きした情報を頼って信じたいという気持ちが強く働くのではないのでしょうか。こういった傾向は中堅以上の葬儀士に多く見られると思います。若い人たちは自分の経験がまだ浅く「知らなくても当たり前」だと思えるところがありますから、教職などから「こういうものですよ」と言えば「へー、そうなんだ」と受け入れやすい素地があるからです。ただそう思って先生やお家族の希望通りにしたら、先輩から「お前、まだ右も左も判ってないくせに勝手にやり方変えるな！」って叱られたりもするんですね。そうして段々頑なになっていく、という悪循環もあります。教会にほとんど関わったことのない人たちは「教会と一口に言ってもいろいろな違いがある」ということもあまり意識にありません。私は葬儀の現場では基本的にはその教会がどのようにしたいか、先生やお遺族がどのようにされたいかをできるだけ酌んでお手伝いすべきだ

と思っ​て​いま​し​て、相​手​が迷​っ​た時​に訊​ね​ら​れ​た​ら「他​の教​会​で​はこ​ん​な実​例​が​あ​り​ま​し​た​がど​う​し​ま​す​か」な​ど​と​お​答​え​す​る​よ​う​に​は​し​て​い​ま​す​が、そ​れ​は​い​ろ​い​ろ​な教​会​で​お​世​話​に​な​っ​て​い​て幅​が​あ​る​こ​と​を​経​験​上​判​っ​て​い​る​か​らと​い​う​こ​と​に過​ぎ​ま​せ​ん。一​番​良​い​の​は日​頃​か​らお​付​き​合​い​の​あ​る葬​儀​社​の​人​た​ち​を教​会​に招​き、礼​拝​に参​加​し​た​り交​わ​り​を​持​っ​て​も​ら​う​中​で「教​会​と​い​う​の​はこ​う​い​う​と​こ​ろ​で​す​よ、私​た​ち​の教​会​はこ​う​い​う​ふ​う​に​し​て​い​ま​す​よ、い​ろ​い​ろ幅​が​あ​っ​て​い​い​ん​で​す​よ」と​い​う​こ​と​を​見​て感​じ​て​も​ら​う​こ​と​で​は​な​い​で​し​ょう​か。